

# 教 仏 名 聞

第75号  
 (発行日)  
 2016年12月1日  
 発行所：真宗大谷派念佛寺  
 〒6638113 西宮市  
 甲子園口2丁目7-20  
 電話・FAX (0798)  
**63-4488**  
 (発行人) 土井紀明  
 mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
 http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》  
 ○ 〈同朋の会〉  
 毎月22日 午後2時始。  
 ○ 〈念仏座談会〉  
 毎月2日と12日 午後3時始  
 ○ 〈聖典学習会〉  
 毎月6日 午後7時始。  
 ○ 〈真宗入門講座〉  
 毎月18日 午後6時30分始。  
 \* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 肉体を持つる罪

真宗では「罪悪深重」とか「地獄一定の凡夫」とか教えられます。この言葉は仏様が私(たち)の姿を教えて下さっているお言葉です。このお言葉通りに実感することはとても難しいことです。

それでも自分の罪をどこで少しでも実感できるかといえ、一番身近なところ、すなわち自分の肉体においてではないでしょうか。肉体を持って生きていくこと、そこに罪を感じざるを得ないので。

私は人一倍寒がりです。これから冬になってきますが、一番避けたい気節です。外に出ると寒いとまず何よりも暖かい場所に行きたいのです。人を押し退けてでも寒さから逃れたいのです。家の中でも身を温かくし部屋を暖かくすることがいつも念頭にあります。とにかく自分の肉体を楽にしたいのです。寒さにあえば寒さから逃れようとし、暑さにあえば涼しくなろうとします。こうした寒熱の中で辛い時は

自分の楽を第一に考えてしまいます。なぜそうなるかといえ、それは肉体を持つているからです。肉体があるがゆえに苦痛が起り、それから逃れようとし、そのように自分の安楽をまず求めていきます。そこに我が身の楽を常に求めようとする「我愛の罪」を感じるのです。

肉体を持つるゆえの罪はまだあります。衣食住でこゝろに食の事です。この身は毎日腹が減るのです。減るから食べねばなりません。三度三度、食べねばなりません。一食でも抜かすと力が出なくなり、空腹でたまらなくなりますが、この体は食べなければ生きられないし、食べられないのはまさに苦痛です。「食わねばならない」という定めをもっているのが肉体。そんな自分の肉体を養い、維持するべく、実に人はどれほど煩い、悩み、貪り、利害を争い、腹を立て、ウソを言い、へつら

い、他者よりも有利になろうとします。しかも今日や明日だけの食いぶちを考えたらいいのではありません。五年先、十年先、いや何十年先のことまで心配して、自分の肉体を保とうとして、思い計らっています。ということとは他者への配慮は後まわし。まずは自分と自分の家族を食うていけるようにすることで頭がいっぱいになります。こういう生き方は浅ましいといわねばなりません。この肉体を持つていると、どうしてもそうやってしまうのが煩惱具足の凡夫の生活です。

しかも他の生き物を殺して、死肉を食べて体を維持しているのです。「お肉をいただきます」とあつさり言いますが、いうまでもなく牛や鶏や魚はいのちを私たち人間に進んで提供してくれているのではあ

りません。死ぬのをいやがる動物を無理やりに殺して食べているのです。それがいやなら菜食でも生きることは可能でしょう。菜食なら生き物を殺さなくてすみます。けれども一日の労働をするためには、エネルギーのある食物を摂らないと肉体がもちません。動物性タンパクを摂らないとしんどい労働はできそうもありません。お釈迦様の出家の弟子たちは一日一食、それも殆ど菜食でした。それで肉体が維持できたのです。なぜなら出家の生活は重労働はなく、じつとして坐禅するのが中心の生活でしたから。しかし、在家できつい労働をせざるを得ない人たちは、あはれは寒い地方では菜食だけでは身が持ちません。ですから動物の肉を摂らざるを得ないのでしょう。

### 《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日 (木) 午後二時始

講師 滋賀県・大谷派玄照寺住職 瓜生 崇師

\*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

それとやはり肉は美味しいです。人間の体のもっている味覚は肉を食べて美味しいと感じる感覚をもっています。美味しいものを食べたという欲望を制御することは大変難しいです。鎌倉時代の高僧であつた明恵上人は食を貪らないうようにと、食事に灰を入れて食べ、美味しい食べ物に対する執着を離れる修行をされたそうですが、こんなことは普通の人にはとてもできることではありません。

こういう日常生活の基本のところ、人間が肉体をもつて生きている、そこに罪があり、罪を離れられないのを感じるのです。仏教では私たちも教えられますが、その通りだと思いません。

ただ一言申し上げたいのは、この我が身の罪の身において、罪の身を罪の身と知らして、そこに働きかけたもう阿弥陀仏の大慈大悲のお心が知らされるのです。

また、我が身の肉体を通して他者の苦しみや辛さに共感することもできるのでしよう。

(了)

# 神力無極の阿弥陀は

(和讃問答)

神力無極の阿弥陀は

無量の諸仏ほめたまう

東方恒沙の仏国より

無数の菩薩ゆきたまう

自余の九方の仏国も

菩薩の往観みなおなじ

釈迦牟尼如来偈をときて

無量の功徳をほめたまう

(「浄土和讃」)

(現代語訳)

(阿弥陀仏の威神極まりなき功徳を、十方無量の諸仏がおのおのの自国の菩薩にたいしてほめたたえられる。それを聞いた、東方の数限りの無いほどの仏の国より無数の菩薩が、阿弥陀仏を供養し法を聞くために阿弥陀仏の極楽浄土にゆかれる。

また、東方を除き、その他の九方の仏国からも菩薩が阿弥陀仏の浄土に往つて阿弥陀仏を見たてまつることは同様である。釈尊は大経に偈頌を説いて阿弥陀仏の無量の功徳をおほめになる)

出典(曇鸞大師「讚阿弥陀仏

偈)

『神力無極の阿弥陀は、十方無量の仏の歎じたまふところなり。東方恒沙の諸仏の国、菩薩無数にしてみな往観す。また安楽国の菩薩・声聞・も

ろもろの大衆を供養し、経法を聴受して道化を宣ぶ。自余の九方もまたかくのごとし。釈迦如来、偈を説きて、無量の功徳を頌したまふ。ゆえに頂礼したてまつる』

\*

\*

D 「この二連のご和讃は曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』のお言葉のままに聖人が作られたご和讃です。これらのご和讃の深さは測りがたいですが、阿弥陀仏の救済力の広大にして不可思議のかぎりないお徳であることを讃えられた歌です」

N 「無数の仏国ということですが、この前、世界は私たちのこの世界以外にも無数にありえるというお話しでしたね」

D 「一応、自然科学の中で考えても、ということですが。先日、テレビで私たちの宇宙

は一つの宇宙であつて、この宇宙の外に無数の宇宙が有りえるという科学番組がありました。そういう意味から言うと衆生の存在する世界は無数といつていいほど有りえるのでしよう」

N 「恒沙というのは」

D 「インドでは無数ということとを喩えて、恒河すなわちカインジス河、の砂の数ほどのという意味です。ガンジス河はインドで最大の河、世界でも有数の大きな河ですが、そこに堆積している砂は非常に粒子が細かいだけで無く、とても数え切れないほどの数であるということによく(無数)を恒河の砂(恒沙)に喩えられるのです」

N 「とても限定できない数の世界がある、領域があると聖者(仏)は直観的に感じられたのですね」

D 「ええ、そう思います。計算してとか測量してということでは勿論ないでしょう。この物質的な宇宙だけのことではなく、精神的な世界、意識の領域も含めてでしょう。私どもには容易に伺いしれません」

N 「容易に伺いしれないときはどう受けとったらいいのでしょうか」

D 「仏様のお言葉は私たちにとつて伺いしれない深い真実を説かれていたのですから、私の小さな頭では分からなくても、仏様の言うことは(まこと)である、と受けとればいいのでしよう。かといつて、それに固執して、他の考えをむやみに否定したり、無理やりに他者に押し付けたりする必要はさらさらありません」

N 「ここで、この二つの和讃は阿弥陀仏の功徳は神力無極であるたたえられていることが中心だということですが、それはどういうことですか」

D 「神力無極とは極まりなき威神力ということ、阿弥陀仏の一切衆生を救いたもうお力は窮まりなき有難い不可思議な救いであるということ、す」

N 「なぜそういえるのですか」

D 「阿弥陀仏は一切衆生を仏にしたいと願われ、一切衆生に代わつて仏になる修行をなされ、それを完成して、南無阿弥陀仏となつて喚びかけて下さつています。その南無阿弥陀仏は、(愚悪の汝のそのま

まなりで仏にする、浄土に生まれさせる)との大悲の仰せであり、その仰せをただ単純に受け入れるだけで仏になら

せていただける。それは本当に不可思議で有難く、私たち凡夫の知恵のとうてい及ぶところではありません」

N 「本願を信じる一つで助かるとよく言われますが、本願は極まりない不可思議なお助けなのですね」

D 「ええ、罪悪深重の凡夫が弥陀の本願を聞く一つで仏にならせていただけるという法は世界中にどこにもないと思います。聖人のご和讃にも

いつつの不思議をとくなかに  
仏法不思議にしくぞなき

仏法不思議ということ  
弥陀の弘誓になづけたり

と詠うたわれています。五つの不思議というのは自然現象とが行いの結果が千差万別にあられてくる業の働きの不思議とか、そういういろいろな不思議の中で、弥陀の本願ほど不思議なものはないと讃えられています」

N 「なぜ不思議と言うことを強調されるのでしょうか」

D 「弥陀の本願は不可思議で、私たちがどれほど考えても、阿弥陀仏だけのお力で私が浄土に生まれ仏にならせていただけるわけは到底わかるものではない、そのことを強調されるのです」

N 「ところが私たちはとかく阿弥陀仏のお助けのわけを聞いて、それを納得して安心しようとするのですね」

D 「ええ、納得し、それによつて助かろうとするのです」

N 「よく〈教えをつかむな〉と聞きますが」

D 「ええ、私の思案や考えで了解して、〈こういう理由で私は助けていただけるのだ〉とわけを知り、納得して、安心してしようとするのですが、いつまでたつても〈これで大丈夫〉とはなりません。たとえ納得できたように思っても、自分の考えで一時的に納得できただけで、またしばらくすると

あやふやになります」

N 「納得したといつても身について分かったのでも了解したのでもないのですね」

D 「ええ。そしていつかは分かるだろうと、ずるずると年月を送ってしまうのです。分からぬままに阿弥陀仏の仰せに信順するばかりです」

N 「幼い子が親の言うことをそのまま信じるように、阿弥陀仏の不可思議な大悲の仰せを素直に受け入れるだけなのですね」

D 「ええそうなんです。ハイと単純に弥陀の本願を信じるばかりなのです。けれども単

純に本願を信じられるかという、これまたなかなか素直に信じることができないのです」

N 「素直に信じることができない」

D 「〈そのままなりで助ける〉と仰せ下さる阿弥陀仏の本願は、私の人智でどれほど考えても〈これは確かである〉と決着できるものではないし、納得できるものではありません。かといつてただ単純に信じようとしてもそれがまたできな

くないのです」

N 「いくら納得しても、また、信じようとしてもダメで、いつまでたつてもラチが明かざうろうろしてしまうのですね」

D 「実は、それが私の助からぬ姿なのです。それが本性なのです。いつまでもうろうろふらふらな者なのです。そんな助からぬ者に弥陀の本願はどう仰せられているのか、そこを聞くのです」

N 「〈助からぬ者を助ける〉〈我が名を称えるばかりで引き受ける〉と仰せられるのですね」

D 「ええ、それを不思議とい、ここでは神力無極の阿弥陀仏といわれるのです。極まりない、有難い不思議な救いのお力です」

N 「十方の仏たちも阿弥陀仏のお助けをほめ讃えられるのですね」

D 「ええ、そうなのです。松並さんの歌に

称いうるお声こゝろが活いきほ仏  
喚よばれて居るとは知らなんだ  
不思議々々の南無阿弥陀仏  
とあります。とても有難い歌です」

N 「私の方からは納得もいかず、信じられないとのことですが、それが単純に信じられるようになるというのは、なぜですか」

D 「それは不思議なのですが、南無阿弥陀仏の思召しにこもっている阿弥陀仏の大慈大悲のお心をお聞きしますと、不思議にも阿弥陀様の慈悲心が私の心に伝わって、とうとう頭では納得できないまま、〈ああ、有難い〉とお助けを聞き受けしめられるのです。そういう意味からいうと、信心は阿弥陀様から与えられるものなのです」

N 「つぎに、十方の仏国の菩薩方が阿弥陀仏のお浄土へ往かれる〈往観〉ということですが、これはどういうことですか」

D 「無数の仏国で、そこで阿弥陀仏のお救いをその国の仏

(真実をいただかれたお方がその国の衆生に説かれます。それをお聞きになって弥陀の本願を信じた方(ここでは菩薩)は阿弥陀仏の浄土に往生まれて、浄土で阿弥陀仏を見たてまつる、ということですから。そういう菩薩が無数におられるとのこと)

N 「私たちの世界は十方の無数の仏国の一つなのですね」

D 「ええそうです、この世界を娑婆世界といい、そこで真理を説かれる仏は釈迦牟尼仏です。そのお釈迦様の教を受けつぎ伝えて下さる方も諸仏といえましよう。私たちでは親鸞聖人です」

N 「親鸞聖人の教を聞いて、阿弥陀仏の本願を受けられたお方はこのご和讃では菩薩とされるのですね」

D 「ええそうです。信心のお方です。その方はこの世が終れば、阿弥陀仏の浄土に至つて阿弥陀仏を拝見するといわれています」

N 「では〈釈迦牟尼如来偈をときて〉とは」

D 「これは釈尊が説かれた『仏説無量寿経』にある〈往観偈〉という偈文の事です」



# 真宗信心問答

(二〇一六年十二月)

N 「親鸞聖人は（地獄は一定すみかぞかし」と仰せられています。自分が地獄一定の者であると知らないダメな人ですか」

D 「そのことなんです。地獄にしか行けない身であるというように自覚が私自身にあるかと言え、恥ずかしなからありません。極重悪人という言葉もありますが、自分は極重悪人であると本当にそう感じているかと言え、そういう感じがいつもあるかと言え、ありません」

N 「では親鸞聖人の場合はどうなんでしょうか」  
D 「親鸞聖人が（私は地獄行きの身である」と我が身を常に実感しておられたかどうか、それは私には分かりません」  
N 「では（地獄は一定すみかぞかし」というお言葉をどういただいたらいいのでしょうか」

D 「自分の心にこのような地獄行きの我が身と知らねばいけないとか、知らなければ助

からない、となると救いは非常に難しくなりますね。けれども阿弥陀仏は私に（我が名を称えるばかりで助ける」と仰せられています。（地獄行きの身と知らねば助けられない）などとはおっしゃっていません。私なんか、地獄行きの身であると感じることがないとは言いませんが、平常はナントモナイ心です。ですから私の心は全く当てになりません。地獄行きの身だと一時的に思っても、しばらくするとケロッとしていくような本当にダメな、それこそ空っぽの私の心です」

N 「極重悪人というのと同じですか」  
D 「ええ、自分は極重悪人と感じるときが無いとは言えませんが、しばらくするとまた自分はましな善人であるという想いも湧いてきます。実際に私の心は煙のような全く信用できない代物です。ですから聞法して少しは自分の悪は知れても、とても極重悪人などという自覚は恥ずかしながら

ありません」  
N 「しかし、昔の妙好人などは自分は地獄行きだとよく言っていますね」  
D 「ええ、そういう妙好人や祖師方の信心は非常に深いので、そういう方々は自分を常にそのように実感されていたのかもしれない。ただ私はとてもものにそんな尊い妙好人のようにはなれません。なれませんが阿弥陀様はこんな私にもなお（そんなお粗末な汝なればこそ」と大悲を注いで下さいます。極重悪人ということに無自覚のまま、助けていただくほかにありません」

N 「では（地獄は一定すみか」とか（極重悪人」というお言葉をどう受けとればいいのか」  
D 「これらの言葉とか、あるいは（自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、広劫より已來、常に没し常に流転して、出離の縁あること無し」という仏語は、それをお聞かせいただくばかりです。そのお言葉通りに自分が感じていようがいまいが、自分の心の状態や内容や実感はこのままで、そのつどこういう仏語をお聞かせいただくばかりです。私がお言葉通りに感じていようが

いまいが、それに関係なくお聞かせいただく。それを聞いて（これが私の本当の姿なのだ）と素直にお聞かせいただくばかりです。自分にそういう自覚があるかどうかではなく、あってもなくても仏祖のお言葉は（まことなのだ」とお聞かせいただくのです」  
N 「自分が極重悪人と思えるかどうかはおいといて、（お前は極重悪人なのだよ」という仏陀や祖師方のお言葉を（私の本性を教えて下さる真実の言葉」とお聞かせいただくのですね」  
D 「ええそうなんです。唐辛子は辛いと思えても思えなくて唐辛子は辛いように、自分は地獄行きの身と思えても思えなくても（汝は地獄行きの身」とのお言葉を聞いて、これが私の本当の姿なのだとお聞かせいただくのです」

N 「（自分の考えは当てにならない）と仏のお言葉は真実なのだ」と仏語を受けられる、それはどうしたらそうなるのでしょうか」  
D 「真宗の教をよくよく聴聞していくと、教えに照らされて、自分の思いや考えは虚仮不実である、仏のお言葉こそ真実だ、という受けとめ方になつてきます。それは仏の光明のお育てと言うほかはありません」  
N 「わかりました」  
D 「ですから、自分は地獄一定の身なのだ」と知らねば助からんとか、極重悪人と分らないければ救われないのだと思つて、なんとかそういう自覚ができ、実感ができるようならねばならないと、それを救われる条件のように思うと、それはむしろ自力になつてしまします。阿弥陀仏の本願は、何の条件も付けておられません。一切衆生のありのまま、今の私のまんまの所に、（そのままなりで引き受ける、タスケル」と喚びづめの広大な大悲心です。底ぬけの慈悲心です。大きな大きなお心、大心海です。私に何も要求されていません。罪悪深重の無自覚なまま今ここで助けいただくばかりです」

(了)

